

## 保護者(2)事例から考える

まずは経過からご紹介していきたいと思います。高校1年生の男の子です。中学生から高校生に上がると急に勉強についていけなくなり、そこから、家に帰ってきてはオンラインのゲームにはまるようになっていきました。コロナということもあって部活もできなくなっていて、友達との遊びも制限されている中で、家に帰ってきてはゲームをしていくという流れになっていきます。それを見かねたお父さんがゲームを取り上げて、Wi-Fiを切ったりする、いろんな工夫をしてみるのですが、それに対して本人は激怒したりとか、怒ったり、時には、殴り合いの喧嘩になるぐらいの勢いでぶつかっている姿も目の当たりにしていました。家族としてもどう対処していいか分からなくなってしまう、そんな状況です。初めは一緒に食事をしていたりしたのですが、ずっとスマホを見ているばかりで、何かを話しかけてもイライラした様子で食卓の中でもちょっとした緊張感があったりします。そのような姿を見て親としては不安が募って、声をかけても拒絶であり、反抗的な態度になってしまっていて、どうしたらいいのかわからない、そのような最中に、学校も休みがちになって、とうとう不登校になってしまいました。お休みになってからはずっと部屋にこもりっぱなしで、何をしているか声が聞こえてくるのですが、誰かとボイスチャットか、ゲームの中かわからないけれども、「死ね」とか「くそ」とか「ふざけんな」とか、暴言等が目立っていて、彼の怒りとかそのような気持ちが、どんどん大きくなっているように見えて悪化しているように感じていて、どうしたらいいか困惑していた、そんな様子でした。

家族の背景について簡単に、説明していきたいと思います。お父様お母様、高校1年生と、小学校5年生の男の子四大家族です。お父さんは会社員、お母さんはパートで短時間勤務されています。特に経済的な困窮はありませんでした。お母さまが困って、学校に相談したところ担任の先生は、話を聞いてくれたり、休みがちになっている本人の様子を心配してくれたり、そんな風になっています。ただお父さんは若干、本人に対して、特に教育に対して厳しくて成績が下がると、子供達を叱っている様子は、お母さんは気になっていた次第でした。勉強がうまくいってなかったり、成績が落ちたりすると、時にはお母さんも責められたりすることもあったりして、あまりお母さんもお父さんに対して、本音で話ができるというような状況でもなかったという感じです。特に子供のことにに関して、なんとなく自分が責められてしまう感じもするので、あまり話し相手がないという状況でした。ただそういった甲斐もあり、本人は中学生まで成績は優秀で、中学校サッカー部で3年間こなしていました。とても自

信を持っていた様子だったのですが、中学校時代は友人も多く対人関係のトラブルもなく、そのような自分自身の息子が、学校に行かなくなり、ゲームをし続けている、時には暴言があり、イライラした様子という言う所ってというのが、どうしていいのかわからない感じで困惑していました。

欠席の連絡で、お母さんから担任の先生によくお電話していました。そしたら担任の先生に相談してみたところ、スクールカウンセラーさんに会ってみるのも一つ手なのではというところで、担任の先生に、スクールカウンセラーさんとの予約を取ってもらい、学校の相談室で、お話を聞いてもらいました。お母さんが学校におもむいて、相談を聞いてもらいました。でも、相談に行くとなると、なんとなくまた、自分の育て方が責められるのではないかと少し不安だったのですが、スクールカウンセラーさんが、ゲームをどうしていかとか、学校に行く行かないというところよりも、本人の生きづらさ、何でそのゲームにはまってしまうのですかねとか、不登校になってしまった本人の抱えている苦勞とか、困難ってどの辺にあるのでしょうかね、というところ。もしかしたら、子供から大人に変わっていく成長のプロセスがあるかもしれないというところに、焦点を当ててくれたので、自分が責められている感じはせず、自然とこの相談に臨みました。率直に自分の思いや、自分の考えを伝えると、スクールカウンセラーさんも、カウンセラーさんの専門的な見立てを返してくれるので、なるほどねと思うことも結構あったりしました。主に週1回、50分の面接が始まっていき、定期的に状況をお伝えしながらカウンセラーさんと本人の理解に努めていきました。時おり、担任の先生も一緒に相談室に入ってくることもあり、学校の様子や、本人の理解について情報共有することもできました。ただ、どうしても、自分の中にある罪悪感があって、それに関してやはり私が悪いのではないかという気持ちが率直な思いとして出てくるのですけれども、スクールカウンセラーさんからは、「誰が、何が」を問題にするのではなくて、と言われました。そうしてしまうと誰かが犯人になってしまって、本当の問題が見えなくなるのを、再三指摘されていました。そして、お母さんから見た率直な本人像を語ることが求められ、自分自身が、本人にどんなことを感じているのか、ちょっと怖いとか、ちょっとイライラするとか、何かこう手におえなくなってきた不安感があるとか、前はこんなことじゃなかったのにとか、なんとなく勉強がうまくいってない感じはするとか、友達関係も以前とは比べて全然激減してしまったとか、LINEで繋がっている様子もあるのだけれども、何かこう今までの様子が見えないとか、そんな不安がたくさん出ました。そうす

るとですね、自分自身もそうですし、本人の課題も少しずつうき上がってきました。ただその本人の理解というところも感じていたのですが、夫に相談すると、なんとなく自分自身が責められてしまう感じがして、相談できなくなり、自分自身もすごく負担がかかり、苦勞していた。ずっと息子のことを考えていたのだけれども、自分自身が苦勞や困難を感じていたな、というところにも気づいてきました。

次行きます。経過ですが、依然と部屋から出てこない本人に、声をかけたとしてもすごく拒絶的だったりとか、たまに調子がいい時は、話がちょっと出来たりはするのだけれど、普段はすごくお母さんに対して、反抗的な態度になるので、どのように関わっていいか分からなくて、正直ちょっと行き詰っているという状況でした。その時に、スクールカウンセラーさんから、理解のネットワークを広げるためにスクールソーシャルワーカーにも入っていただくのはどうかという提案を受けました。スクールソーシャルワーカーって何かなと思ったら、訪問したり、彼のサポートをしてくれる支援施設につないでいただいたりなど、時にはこういった家族の問題だったり、自分自身の家族関係親子関係の問題も、一緒に、ご本人と自分自身のご相談にも乗ってくださるところでした。なんとなく、本人をここに連れて行きたいと思ったけど、当然来ないので、訪問であればもしかしたら本人の話すきっかけもできてくれるかなと思いOKすることにしました。流れとしては、いきなり家庭訪問に来るって言うことではなく、まず、スクールカウンセラーさんとの席に、スクールソーシャルワーカーさんも同席していただき、さらに担任の先生も一緒に来ていただき、今まで見えてきた本人の理解や、状況、これまでの様子、その辺も情報共有し、理解を共有した上で訪問するお約束が決まっていきました。とはいうもの、スクールソーシャルワーカーさんが来るというところを本人に伝えると、絶対会わないと抵抗的だったので、玄関先のみにしました。家に上がることすらちょっとはばかったので、最初玄関先のみでお話ししたのみでした。そこでも本人が登場しなくても、家族が相談することができて、夫がいる時というのは夫と一緒に、このように夫婦関係が相談できたのは良かったかなという風に思っております。また間に誰かが入っていただくことによって、普段なかなか話せない想いも、共有することができて、さらに夫の考え方も聞けるので、さらに本人の理解が深まってきた、そのような印象を受けました。

次行きます。経過です。お父様のお話を聞いていると、ゲームのこと進学のことを強く言い過ぎていたのかなというところは、お父様自身も、振り返っておられていた

ところでは、学校で関係が作れず居場所を失っていたり、これまで勉強が生活の中心となっていたが、そこで行き詰まった時に、自分は何したらよいかわからなくなっているのではないかと、学習環境が一変して本人も何をしたらいいかわからない状況になっているのではないかと、というところをお話していきながら、責められている気持ちもだんだん和らいでき、問題が自分ではなくて、本人が生きづらさを感じている課題に向いていくことにより、気持ちや心も楽になってきた感じはあります。楽になっていくと、当然、彼にいつから行くのという言葉かけなんてところもあんまりしなくなるようになっていて、そのような何気ない会話が増えていき、ある時、定期的に来ているスクールソーシャルワーカーさんに、家族と一緒になら会ってもいいという話が、本人から出てきました。その中で、またいつものようにスクールソーシャルワーカーさんが来た時に、本人も登場して、お父様の気持ちお母様の気持ち、そして本人の気持ちを率直に、安心安全の場で話をするところがあり、そこは批評批判することがなく、またルールを設けられていたので、安心する場でお話することができました。本人を説得するのではなくて、母としての自分の思い、そしてお父様も、お父様の率直な考え方、本人に寄り添うとかではなくて、どう考えていたのかというところを自分を主語にしてお話しして、自分の思うことを順番に話すことができ、それぞれの気持ちがわかってきました。その後もスクールソーシャルワーカーが家族相談に行ったり、定期的に学校の相談をしていきながら、担任の先生も学習面に対してどうしたらいいかなと心配していたので、専科の先生に取り合い、課題を渡していただいたりとか、出席の状況、成績の情報とかそういった客観的な情報も教えて頂きながら、サポートしていただきました。今度は、支援会議という形で、学校に呼ばれ、そこには管理職を含めてスクールカウンセラーさん、担任の先生、スクールソーシャルワーカーさん、普段お会いしてるので、いつものような緊張感はなかったのですが、会議室で今まで見てきたことの情報共有、保護者の理解、スクールカウンセラーさん、ワーカーさんの情報を共有していき、今後どのように対応していこうか、対策して行こうかなというところで対応の在り方を模索していきました。背景には発達の違いが見えて、もしかしたら本人が、勉強のできなさついていけなさ、わからなさというのは、環境が変わってスタイルが変わってしまって、勉強では、中学校までは塾に通いながらこうしたらいい、ああしたらいいというところで先生が指示してくれたことに対して、高校に上がった時、自主的に勉強が任された時に、何をどうしていったらいいかわからなくなりました。というところが一つ困惑の理由だったりします。本人に対して確認してみても、もしかしたらそうかもしれないと言う所だったの

で、勉強の仕方を効率的にするために、専門家に相談してみるというところで、本人に聞いてみたらのってきたので、スクールソーシャルワーカーに相談してみたところ、精神保健福祉センターに相談して医療機関を紹介してもらいました。医療機関でははじめ、先生にお会いし、どんなことがお困りかというところで、スクールソーシャルワーカーさんとも相談し、情報共有して、色々見ていた情報も共有していたので、保護者同伴でオッケーということだったので、本人の気持ちとして、勉強ができないのでそこを代弁する形で、勉強を効率的にする方法が知りたいとお伝えし、高校にあがってみたら、わからなさが出てきたところお伝えしたら、先生の方からスムーズに、病院に在中している心理士さんにつないでくださいますして、そこから心理検査を実施して、自分自身のものの考え方、くせ、というところを検査結果から、その結果をお伝えして、さらに、心理検査の結果と、お医者さんの話を共有したところ、スクールカウンセラーさんがその検査結果に基づいて分かりやすく、本人と家族の意向を伝えてくれて、さらに本人の今まで苦労していたことや、こんなに感じていたところが、明確になっていきました。そのようなことを共有することによって、本人をとりまく理解、回復のネットワークというのが、教員とかスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーそして両親、後はドクター病院の心理士と、回復のネットワークができてきて、医療的なことで困ったらそういった検査のことや、不安感が出てきたり、そのようなことがあれば、お医者さんに「相談しに来てもいい」というところで、病院にもつながりましたし、病院の心理士さんも、困ったら病院に来てもいいよというところもうかがっていますので、定期的に通いながら、そこで本人も、お医者さんに会ったり、心理士さんに会っていただいたので、スクールソーシャルワーカーさんを始め、本人がいろんな方と話すきっかけにも繋がっていったのかなという風に思います。

では次いきます。経過です。保護者が、担任とスクールカウンセラーそして本人が医療と繋がり、本人の生きづらさの理解が深まっていきました。そこから学校でできること、あるいは保護者としての関わり方もふりかえって、だんだんと回復環境が整えられていました。関係者の中で本人の理解が深まることで、本人もわかってもらえるという感覚が増して、少しずつ生きづらさが周囲に語れるようになってきたように思います。さらにスクールソーシャルワーカーの訪問にて、家庭での対話が促されて、ソーシャルワーカーさんが帰った後も少しずつですね、お父様やお母様の間での話が、家族の中でも始まっていたように思います。そのわかってきた点というところ

を、スクールカウンセラーを含めて学校と共有することによって、本人の困りごとが、家族、学校でも共有することができて、理解することが促され、自分自身、家族関係、本人の成長に合わせて、関わり方も改めていきましたし、学校も柔軟に対応してくださったので、少しずつ本人が語れるようになって、関わりが変わってきた、そのような変化が見え始めてきました。